

The 39th

Passenger Cars & Motorcycles

TOKYO MOTOR SHOW 2005



News

vol. 14

平成17年11月2日

第39回東京モーターショー2005

Passenger Cars & Motorcycles
乗用車・二輪車

"Driving Tomorrow!" from Tokyo みんながココロに描いてる、くるまのすべてに新提案。

バイクとスクーター融合の世界へ



若者たちが、二輪車の世界に戻ってきている。人気の主役は250cc超の“ビッグスクーター”と呼ばれるモーターサイクルだ。加えて今年は、高速道路の2人乗りが実現し、6月には、650cc以下の排気量についてAT限定二輪免許が新設されるなど、規則の緩和も追い風となっており、需要の膨らみを期待させている。

こうした市場環境好転のもとで、ホンダ、ヤマハ、スズキ、カワサキの国産二輪車メーカー4社は今回の東京モーターショーでどのような出品展示を行っているのか――。

世界初披露、日本初披露の二輪車出品は4社合わせて50台近くにのぼる。需要の二極化現象を受け止め、各社ブースとも年配者ユーザーに向けたラグジュアリーな大型車展示が目立つ。若年層、女性層に人気高のビッグスクーターやそれ以下のクラスではファッショナブルなデザイン傾向が強まり、

用途に応じた豊富なバリエーションが展開されている。また1980年代の“レーサーレプリカ”への愛着を残す30～40歳代のライダーを対象に、スーパースポーツモデルの出品も数多く見受けられる。

ハイブリッド二輪車や燃料電池バイク、前後輪連動ブレーキ、ATとMT走行の選択ができるオートシフト機構など、先進技術の装備も見どころのひとつだ。

さらにはホンダの「E4-01」、「フォルツァZ ABS」やヤマハの「Gen-Ryu」、「マグザム3000」、スズキの「スカイウェイブ250タイプS」などのコンセプトモデルが、バイク本来のスポーツ性能とスクーターの持つ快適性、積載性を融合させた機能・デザインを提案しており、排気量を問わず、ビッグスクーター・ブームの輪が、新しい方向をめざして広がる可能性を感じさせている。



「E4-01」



「フォルツァ Z ABS」

ホンダが提案するワールドプレミア (WP) 4台のうち、「E4-01」は、900ccエンジンを搭載したスクーターライクなコンセプトモデル。先進のATやユニットプロリンクサスペンションとプロアームを組み合わせることでスーパースポーツ並みの走り、ツアラーを凌ぐ巡航時の快適性を両立させている。これまでのカテゴリーに属さない新世代モデルの価値創造をめざしている。

若者のライフスタイルによりフィットさせようとの狙いだ。

WPで残る1台の「フォルツァ Z ABS」は近く市販予定の250ccATスポーツクルーザー。レーシングコーナーでは今年の鈴鹿8耐ロードレースの優勝マシン「CBR1000RRW」をはじめ、各カテゴリーのマシンを展示。

安全・環境コーナーには世界初の量産車用二輪車エアバッグシステムを搭載した「ゴールドウイング」が出品されている。

125ccスクーターを題材に、ホンダの若手開発者集団がデザインしたコンセプトモデル「NP6-D」が面白い。アクティブ性を重視する一方、積載能力を高めるためにシート形状をサイドから伸びるスイングアーム方式とした。「NP6-S」も合わせ、



若者向けの「NP6-D」

ブリーフィングコラム



夢の実現に向け、常に新たな挑戦

本田技研工業 福井 威夫 社長

テーマは「ドリームウイングス」と「夢の実現に向けて、常に新しい挑戦を続ける」です。この10年間で二輪車の平均燃費を34%向上させ、世界初の量産車用エアバッグシステムを開発するなど「環境」と「安全」の領域でのチャレンジングな展開も合わせ、ホンダの未来へ向けた新しい価値の創造を感じ取って頂きたい。

エンジンがバイクキャラクターを決めた「ストラトスフィア」



上質な味わいの「ストラトスフィア」

代表出品車はワールドプレミア (WP) のコンセプトモデル「ストラトスフィア」。スズキが“実現可能な近未来モーターサイクル”として提案した。

極限までコンパクト化した1,100cc直列6気筒エンジンを横置きに搭載、同クラスでは味わえなかった伸びのある加速感と滑

らかな走りのフィーリングを引き出すことに成功している。スタイリング面でもエンジン造形が味わえる機能美を追求し、エンジンがバイクの上質なキャラクターを決定付けた作品。

また、ATとMTの両方の走行選択ができる「オートシフト機構」が装備されているのも大きな特徴だ。

同じくWPの「GSR400」はリアルスポーツネイキッドマシン。GSX-Rシリーズの技術を投入した「新開発水冷4気筒エンジン」を搭載。400ccでは初装備となる電子制御式フューエルインジェクションを採用している。

ビッグスクーターの進化系としての参考出品車「スカイウェイブ250タイプS」(WP) も、高級感とスポーティーさが融合したデザインが魅力的。

環境技術提案として、燃費効率を従来のエンジンより40%以上向上させた「連続可変ミラーサイクルエンジン」を展示している。



新提案の「連続可変ミラーサイクルエンジン」

次世代モデルのあるべき姿を提案

スズキ 津田 紘 社長

今回は「人を運ぶ、モノを運ぶ、夢を運ぶ、リアルタイム」としました。

スズキはこれからも、遠い夢物語ではない、近い将来に実現する技術を構成して、次世代のモーターサイクルのあるべき姿を提案していく。今回のショーにはモーターサイクルの原点を、時代の変化に合わせたモデルで用意致しました。



ビッグスクーターの進化系「スカイウェイブ 250 タイプ S」



注目度の高いコンセプトモデル「Gen-Ryu」

JR横浜幕張駅周辺と長いモールで結ばれている北ホールに入ると、すぐに目に飛び込んでくるのが、中央通路を挟んで右側にあるヤマハ発動機のブース。「ヤマハミュージアム」と銘打ってホワイト系を基調とする洒落たブースデザインが目を引く。今年創立50周年を迎えたヤマハでは、「次の50年へ、新たな感動創造に向けて突き進んでいく」（梶川社長）という大きな節目の年。それだけに、“The Art of Engineering”をメインテーマとして、コンセプトモデルをはじめ、市販予定車、輸出仕様車など、ワールドプレミア（WP）9機種、ジャパンプレミア（JP）7機種を含めた合計21台を展示しており、かなり気合いが入っている。



燃料電池バイクの「FC-me」

中でも注目度の高いのは“ハイパフォーマンス・ハイブリッド・モーターサイクル”を提唱するコンセプトモデル「Gen-Ryu」。軽量コンパクトなYZF-R6系600cc エンジンと高出力・高効率モーターを組み合わせ、モーターサイクルを操る楽しさとスクーターの快適性・積載性の双方の長所を両立、ボイスナビや後方モニタリングなども装備している。

ブース最前列に置かれた「DEINONYCHUS」はインホイールモーター二輪駆動の電気バイク。車体レイアウトの自由度を活かし、アルミフレームが前後に伸縮するのが特徴だ。このほかにもメタノール水溶液を使用する燃料電池バイクの「FC-me」などWP、JPのコンセプトモデルが目白押し。ヤマハブースは元気いっぱいである。



インホイールモーター二輪駆動の電気バイク「DEINONYCHUS」

ブリーフィングコラム



「オンリーワンブランド」を目指したモノ作りの姿勢をアピール

ヤマハ発動機 梶川 隆 社長

今回の東京モーターショーでは「オンリーワンブランド」を目指したモノ作りの姿勢をアピールしています。ヤマハらしさ、独自技術の追求、高付加価値モデルの開発はもとより、新動力源を指す「スマートパワー」への取り組みについて、ニューモデルや参考出品モデルの展示を通じ、具体的な提案をしています。

川崎重工業

最新のフラッグシップモデル「ZZR1400」などが注目のマト



グリーン系のカラーが鮮やかな川崎重工業の展示ブース。2006年ニューモデル7機種を含む合計26台を出品。4連プロジェクタービームヘッドライトなどでデザインを一新、海外市場で長年にわたり高い評価を受け、カワサキモーターサイクルのイメージリーダーである最大排気量クラスのフラッグシップニューモデル「ZZR1400」が注目のマト。

また、サーキットでのスポーツ走行において高い性能を発揮する大排気量スーパースポーツモデル「Ninja ZX-10R」を



中排気量スポーツモデル「ER-6n」



最新のフラッグシップモデル「ZZR1400」

展示。今年6月に発表され、欧州で高い評価を得ている中排気量スポーツモデル「ER-6n」、その兄弟モデルとして、高速走行時などの空力を改善する専用フルカウルを装備したスポーツモデル「ER-6f」などもバイクファンの人気を集めている。



「Ninja ZX-10R」

ブリーフィングコラム



個性的な“感性能”を自負するカワサキブランドをお披露目

川崎重工業 森田 進一 常務

モーターサイクルにもさまざまなブランドがあります。その中で「やっぱりカワサキ」と評価されるカワサキらしさ、つまり、個性的な“感性能”を自負するブランドをさらに高めていくことを経営の最重要課題として取り組んでいます。今回の東京モーターショーでも技術の最先端を感じ取ってもらえるものと確信しています。

「持続可能なモビリティへの一歩」

■開会挨拶

小林敏雄氏 (財) 日本自動車研究所所長

■イントロダクション 司会

増永邦彦氏 (財) 日本自動車研究所FC・EVセンター長

■講演者

石谷 久氏 WEVA (世界電気自動車協会) 会長/慶應義塾大学教授

伊藤慎介氏 経済産業省自動車課課長補佐

渡辺正五氏 (財) 日本自動車研究所FC・EVセンター次長

吉田裕明氏 三菱自動車工業(株) 技術開発本部先行車両技術部シニアエキスパート

■主催: (財) 日本自動車研究所/International Energy Agency (IEA)

未来のクルマ社会は、地球温暖化や急成長のアジア市場を考えると、環境、エネルギー、産業、社会の調和が不可欠の課題だ。

シンポジウムではまず石谷氏が持続可能なモビリティとして、純電気自動車 (BEV)、ハイブリッド自動車 (HEV)、燃料電池自動車 (FCV) などの電動車両の役割に期待を表明。

続いて伊藤氏は①排出ガスの有害物質の抜本的削減②CO₂排出量の抜本的削減③過度に石油に依存した運輸部門のエネルギー対策→石油代替燃料利用といった現実的課題を踏まえ、行政の立場からこれら3つの問題をバランスをとりながら解決していく方針を説明。このため短期的にはトッランナー方式によるガソリン車お

よびディーゼル車の燃費改善を継続するものの、中長期的にはFCV、HEV、EV、CNG (天然ガス自動車) などのクリーンエネルギー車の普及を図るとともに、ポスト新長期規制のクリアを前提にクリーンディーゼル車の普及の意義にも言及。

一方、渡辺氏はFCV普及のための基盤技術について

講演。水素・FCVの国際基準の標準化、規制見直し、安全性評価などの水素・FCVを取り巻く諸問題を分析。その上で、水素利用の実現に向けて、安全・便利な水素利用が可能だと結論づけた。

また、吉田氏は自動車メーカーの立場から、とくにEVの挑戦 (開発と普及への取り組み) について解説。過去の開発の歴史を振り返りながら、リチウムイオン電池の性能向上を報告。自社の次世代型電気自動車MIEVの開発展望を示した。合わせて、EVの普及に向け、政府の補助制度や優遇税制の充実を訴えていた。

なお、シンポジウムの第2部として、IEAによる電動二輪に関する公開ワークショップも開催された。



TOPICS クルマも電気に“スイッチ”——東京電力



クルマ、給湯を200Vでまかなう“オール電化”をデモ

東ホール、中央ホール間の「いいいのモール」に設置された東京電力ブースのキャッチフレーズは「Switch!」。電気自動車、スバル「R1e」と、超臨界二酸化炭素を用いた世界初の家計用ヒートポンプ式給湯システム「エコキュート」をメインにすえ、オール電化への“スイッチ”をうたっている。

使用電源は家庭にも簡単に引くことができる交流単相200ボルト。航続距離120km(10・15モード走行時)を持つ「R1e」のバッテリーを、特別な装置を使わずに5分で90%充電することが可能という。今後、「R1e」をベースとしたEVを東京電力の社用車として配備し、実証実験を行っていく。EV時代の到来を思わせる未来感たっぷりのブースだ。

問い合わせ、迷子、落とし物 困った時のサービス・スポット インフォメーションプラザ



会場中央1階にあるインフォメーションプラザ

来場者からの問い合わせ、迷子、落とし物の受付窓口を併設したインフォメーションプラザ (会場中央1階) は連日大忙し。問い合わせはやはり出品企業のブースや各種イベント会場を聞かれることが多く、1日当たり100~200件。7人のスタッフのほか通訳も1人いて外国人にも万全の対応。

土・日にもなると30人近い駆け込みがあるという迷子センター。場内アナウンスは出来ないで、赤いジャンパー姿の運営スタッフ約350人、警備員約340人 (休日ベース) が服装や特徴などを手がかりに総出で探し出すというから驚きだ。たいてい1時間以内に見つけられるスピードぶり。一方、センターで親を待っている迷子は5人のスタッフに「機関車トーマス」のビデオやおもちゃで遊んでもらえるから安心だ。

土・日の落とし物は100件前後にのぼる。カサ、携帯電話、デジカメといったところが多いが、なかには、なぜだかお守り袋、ケーキが箱ごとといった変わりダネもあったとか。

今日のイベント (予定) 2005年11月2日 (水)

* シンポジウム

14:00~17:30

事前登録者優先

第6回 自動車安全シンポジウム

—対策の効果評価とこれからの自動車安全対策—

(国際会議場 2階・国際会議室)

* bay fm生放送

13:30~14:00

フェスティバルパーク

(西休憩ゾーン)

* クリーンエネルギー車同乗試乗会

10:30~16:30

特設専用コース

(幕張海浜公園内 メッセ周辺公道)

* ジャグリングパフォーマンス

12:45~13:15

14:45~15:15

16:00~16:30

フェスティバルパーク

(西休憩ゾーン)

※天候等の都合により予定が変更になる場合があります。

KONICA MINOLTA

ON DEMAND PUBLISHER C-51N

ご存知ですか?

コニカミノルタ オンデマンドプリントシステムは、

世界56ヶ国の主要新聞276紙をサポート。

このニュースは コニカミノルタ ON DEMAND PUBLISHER C-51N で出力しています。

コニカミノルタ ビジネスソリューションズ株式会社

ODI事業部

TEL 03-5205-7820

Email odi-info@bj.konicaminolta.jp

URL http://www.ebook-print.com

TOKYO MOTOR SHOW 2005

11月1日の入場者数

入場者数累計

71,500人

945,200人

東京モーターショーニュースVol.14 2005年11月2日発行

発行所 社団法人 日本自動車工業会 広報室

〒105-0012 東京都港区芝大門1丁目1番30号 日本自動車会館

TEL.03-5405-6119 FAX.03-5405-6136

WEB SITE www.tokyo-motorshow.com

JAMA